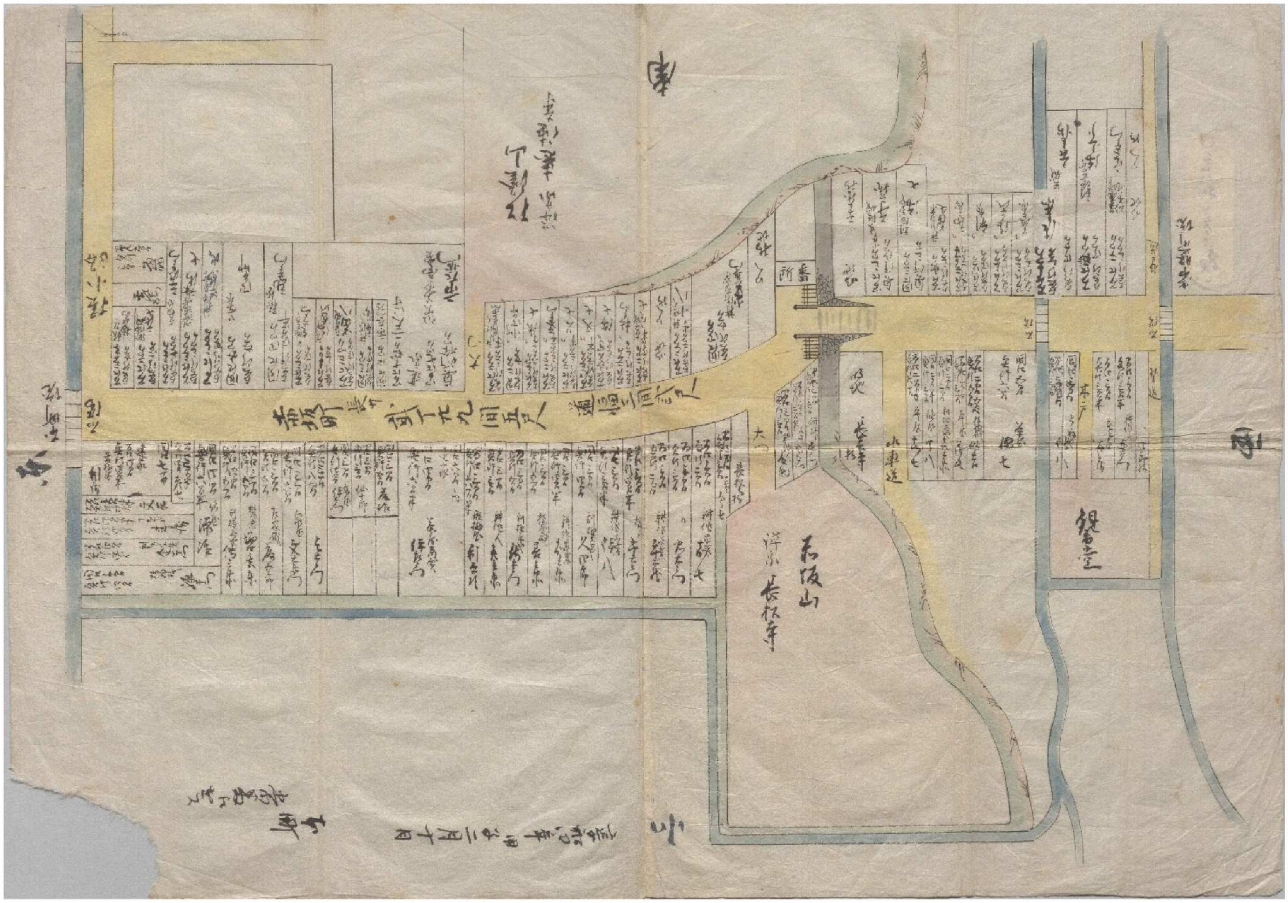
市史のひろば

第４号
（令和５年８月）



享和４年 赤坂町絵図（高崎市立中央図書館蔵）
〔画像は群馬県立図書館デジタルライブラリーより〕

《 目 次 》

高崎駅構内平面略図を読み解く（原田　雅純）　… 2
世襲宗教者の力（久保　康顕）　… 4
執筆者紹介・表紙写真解説・奥付　… 6

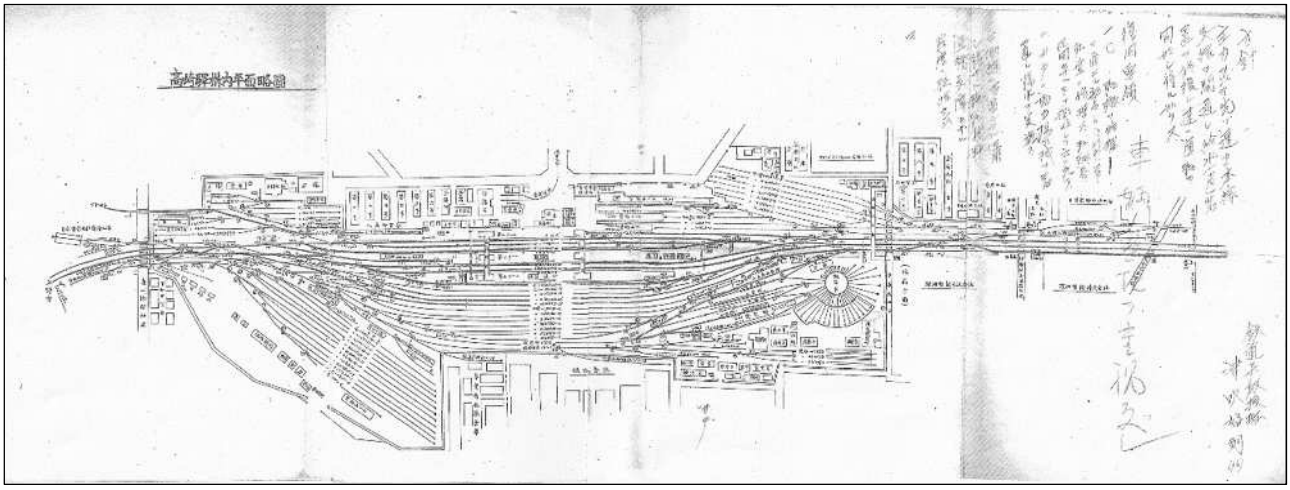
原田さんは昭和 30 年代より写真撮影を始め、撮影点数は 8 万点に及びます。その写真を画像データ化したものを図書館へご寄贈いただいており、一部は図書館ホームページで閲覧することができます。

今回は、「高崎駅構内平面略図」に基づき昭和 10 年代の高崎駅の様子をご紹介いただきました。高崎駅が、時代と共に大きく姿を変えていることが分かります。

高崎駅構内平面略図を読み解く

原田　雅純

『高崎駅構内平面略図』は、36×100 ㎝の大きさで、駅構内の線路配置などを示している。作成年月日は記されていないが、図に「理研製機株式会社」があることから昭和 13 年(1938) 11 月以降、また国鉄の「通信支区」があり通信区に昇格する前の昭和 16 年 7 月以前に作成されたと推測される。



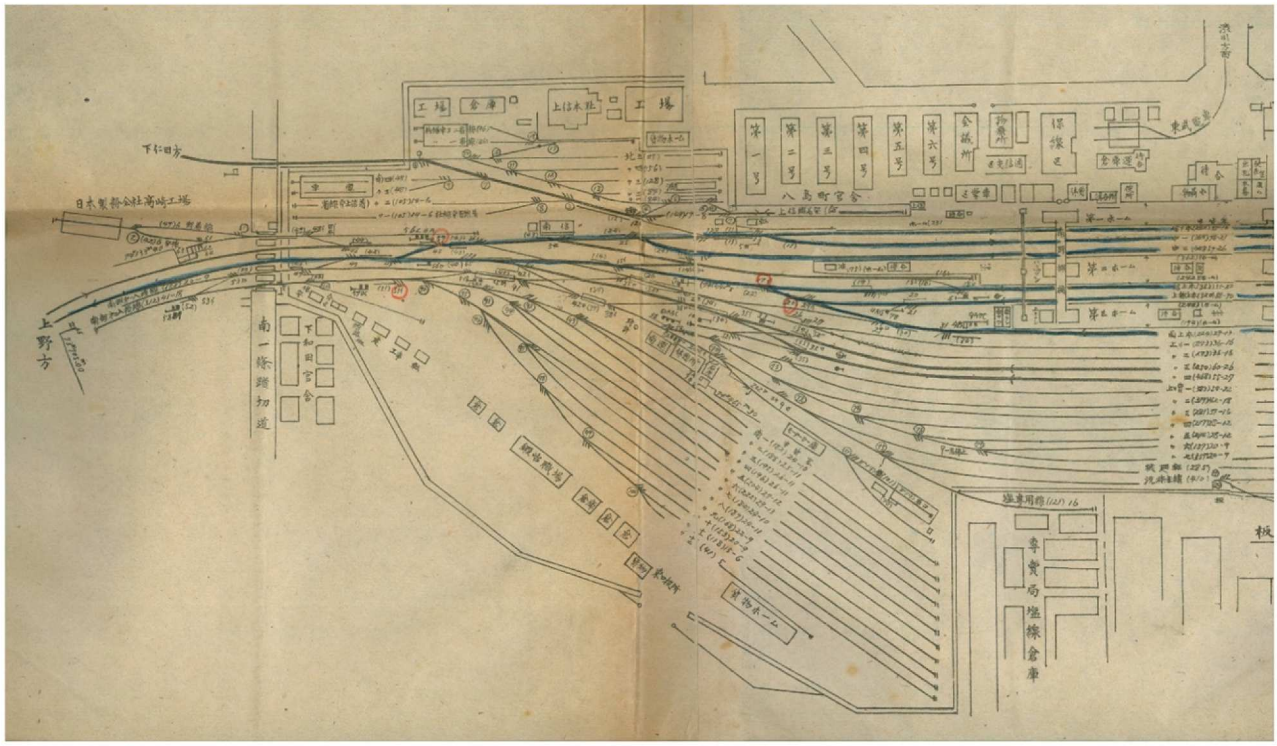
高崎駅構内平面略図（原田雅純氏寄贈　高崎市立中央図書館蔵）

線路、分岐器、信号機を示した構内配線略図は、昭和 11 年、同 27 年のものなどがあるが、正縮尺に近い形で国鉄業務機関の名称まで記されたものは少ないと思われる。

駅前通りを駅に向って行くと、右手（南側）には東武電車の乗り場がある。その南は保線区の庁舎である。この建物は新幹線ができて高架橋の下に移転するまで、この位置にあった。さらにその南には鉄道診療所がある。昭和 2 年 4 月に高崎鉄道治療所として設置され、同 11 年 9 月に鉄道診療所に改称した。戦中戦後は市内昭和町の市立高女前に疎開していた。後の高崎鉄道病院の前身である。診療所の奥にある通信支区は、「大宮通信区高崎支区」である。高崎線は大宮通信区が担当していたが、昭和 11 年 9 月に同区高崎支区が設置され、深谷－岩本間、高崎－沓掛間、寄居－小野（信号場）間を担当した。通信支区は昭和 16 年 7 月に独立して、高崎通信区が発足している。

診療所・通信支区の南には職員の会議所があり、さらにその南には「八島町官舎」が第 1 号から第 6 号まで並んでいた。会議所の東側でホームに面したところには「車掌区」がある。鉄道国有化後は高崎など主要な駅に車掌監督と車掌が配属され、駅長の管理下に置かれた。大正 3 年（1914）3 月に駅長の管理から分離して上野運輸事務所の直属となり、大正 7 年の職員録によると「上野運輸事務所列車従事員高崎在勤」と記され、車掌監督、車掌監督助手、車掌、車掌心得、車掌乗務見習の氏名が記されている。その後、昭和 4 年 5 月に高崎車掌所が設置され、同 11 年 9 月に車掌区に名称が変わった。高崎車掌区はＪＲ移行後もほぼ同じ場所で業務が行われてきたが平成 17 年 12 月に廃止され、高崎運輸区などに引継がれた。

駅に向って左手（北側）には貨物扱所と電信電話の建物があった。電話交換は以前は高崎



駅舎内にあったが、駅舎とは別の独立した建物である。磁石式交換機であったが、昭和 17 年 3 月に共電式交換機に変更された。なお、電話が自動交換機になったのは昭和 41 年 3 月である。貨物扱いのホームは今の高崎ターミナルホテルの北側で、その西側の道路に面した入口からは、運送の荷車やトラックが出入りしていた。貨物ホームの北西には貨物入換え線があり、その西には購買と電力区の派出があった。

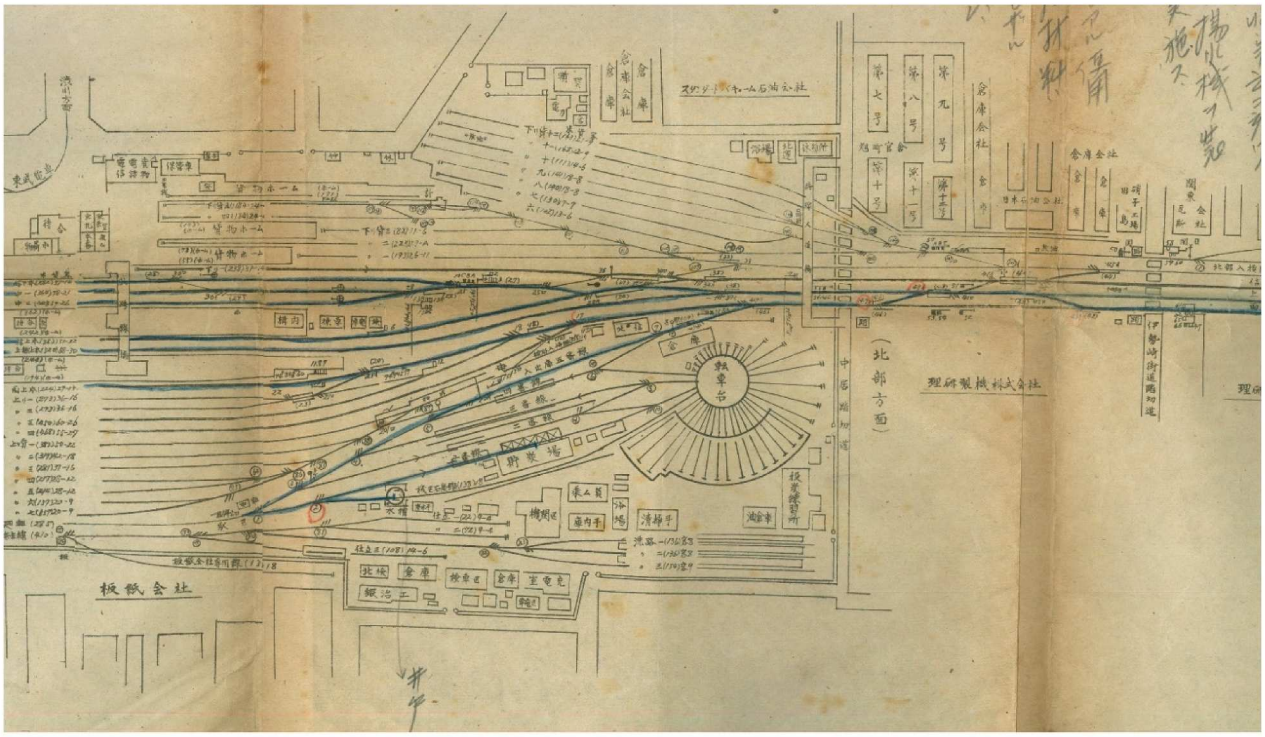
「購買」は国鉄共済組合購買部の上野購買支部高崎配給所で、国鉄職員に生活必需品を安価に販売及びあっ旋する。昭和 19 年 4 月に購買部は物資部へと名称が変わった。購買の東にあるのは電力区の派出である。当時は高崎線、上越線は電化されておらず、電力区があったのは田端、横川、越後湯沢の 3 ヶ所で、横川電力区の派出が高崎に置かれていた。高崎電力区が設置されたのは高崎運輸事務所開設と同時で、昭和 17 年 3 月である。

駅構内の北には中居踏切道があったが、その道路の北側で線路の西側には旭町官舎第 7 号～12 号の 6 棟があり、八島町官舎の続き番号が与えられていた。

踏切には跨線人道橋があり、ここに登ると駅構内や機関区の扇形庫、転車台がよく見えた。跨線橋は昭和 9 年の地図には記されており、昭和 6 年に上越線が全通してから列車が増加し、踏切遮断時間が長くなったので作られたと思われる。機関区構内は広く、事務所のほか乗務員、庫内手、清掃手の詰所、投炭練習所があり、また貯炭所、水槽も転車台につながる線路に設けられている。

機関区の東寄りには検車区と車電区があった。検車区は客車・貨車の検査、修理、注油、清掃等を行い、車電区は客車・貨車の照明、発電機、蓄電池など電気装置の保守及び充電を受持った。検車区・車電区は昭和 26 年 4 月に廃止され、新たに客車区、貨車区が新設されている。

高崎駅東側には高崎板紙会社（昭和 24 年高崎製紙に改称）と専売局の塩倉庫があり、いずれも専用線があって貨車が直接乗り入れて貨物の積み下ろしが行われた。高崎駅の専用線はこの 2 社のほか、日本製粉、関東瓦斯（ガス）（昭和 20 年に東京瓦斯へ合併）、日清製粉、小島機械製作所の計 6 社に設けられていた。昭和 47 年頃には東京瓦斯（ガス）と小島機械製作所の専用線が廃止され、高崎製紙は昭和 50 年 9 月に廃止されている。日粉、日清の専用線も



昭和 59 年ころには使用されなくなった。

専売局倉庫の南側には客貨車の留置線があり、貨物ホームもあって貨物東口扱所が置かれている。両毛線には昭和 9 年からガソリンカーが走っていたが、高崎機関区に 3 両が配属されて、そのガソリンカー車庫が客貨車留置線の西にある。ただし戦時のガソリン統制で昭和 15 年には運転休止とされていた。

駅構内南側を横切る南一条踏切の東には、下和田官舎が 7 棟あり、また保線区の踏切保安掛詰所、高崎線路分区、線路班、建築・工事の詰所が見られる。高崎保線区には線路分区が高崎のほか深谷、神保原、群馬総社、敷島、児玉に設置され、また各駅には線路班があった。

上信電鉄本社の北にある工場は、昭和 8 年から操業開始した鋳鋼工場で、東三条通りにあった高崎金属㈱の前身である。

上信越線、両毛線などが分岐し、鉄道に携わる多くの人が暮らした高崎は、大宮や郡山などと同様に“鉄道の町”といわれたが、現在では交通体系の変化や都市機能の複雑化などにより大きく変貌している。

久保さんは、修験道を中心に宗教史関係を研究されています。

今回は、榛名山信仰における御師の存在意義について、元禄 4 年「榛名山五人組人別宗旨改之帳」の分析を通して考察を加えていただきました。非出家者である御師が榛名山の組織や信仰の維持に大きな役割を果たしていたことが指摘されています。

世襲宗教者の力

久保　康顕

群馬県内有数の山岳霊場である榛名神社（高崎市）。現在の鳥居門前には食事や土産を提供する店が建ち並ぶが、これらはかつて参詣者・講の宿泊や休憩所などとして、榛名山信仰の人びとを助けてきた御師の家々であることは、よく知られよう。

さて、榛名神社は近代初頭に神仏分離が行われるまで、満行権現を祀る巌殿寺と呼ばれる

神仏習合の霊場で、いくつかの寺院と僧侶が祭祀の主要部分を担っていた。ここでは、こうした巌殿寺や榛名山信仰の維持をめぐる門前の御師の存在意義について、問題提起したい。

元禄4年（1691）「榛名山五人組人別宗旨改之帳」（『榛名町誌』資料編3、№276）は、当該期の巌殿寺関係者と御師家ら全体の人的状況を記録する。まずそこにみえる寺僧の様子を示そう（数字は年齢。同家族の者を「・」で、同じ肩書・続柄の者を「／」でつなげた。肩書・続柄等は史料とおり）。

①中之坊52、道心46、下男35／54／55／22／17
②万福院38、下男23
③泉乗院46、下男61
④金剛院27、下男37
⑤実相院13・外舅坊主54、下男53／30
⑥極楽院27、道心50

参道に立ち並ぶ御師の家々
〔明治21年「上野国榛名山真図」（部分）、群馬県立図書館デジタルライブラリーより〕

巌殿寺組織のトップは別当（現、本坊跡）で、この時期には高崎市下里見の光明寺住職が兼務していて常駐しておらず、この五人組帳に出ない。中之坊から実相院は近世には「衆徒」と呼ばれ、日常的に寺役を勤めていた寺院である。極楽院は、社家町の入り口付近の山側斜面の墓所（山内居住者の葬所）にあった寺院（無常所・葬送寺院）である。

これら6つの寺院にいる6人の僧侶は、剃髪の出家僧とみてよい。妻や子供といった配偶者・血縁者を置かず、出家僧として暮らしを営んでいる。雇いの下男、あるいは仏道を志す俗人である道心をおき、少人数所帯の寺院生活を送っていることがわかる。

では、御師家について見てみよう。榛名山御師を代表する大御師家である大坊と般若坊、そして規模の小さな御師家の様子を次に示す。〈　〉内は他出している人。

○大坊52・女房34・男子〈16（寛永寺奉公）〉／11／6／3・姪17・大坊母65・女房母62、下男21／33／43／38／12、下女47／43／20／32／3／52／17、譜代下男42・女房36・男子14・女子7
○般若坊55・女房43・〈女子27〉・男子25／23・〈妹20〉・弟10・従弟20、譜代下男72・女房57・譜代下男32・27・17、下男40・女房（譜代下女）41・男子10・姥80、下男24／20／25、下女40／19／25
○大泉坊44・女房40・〈女子22〉・男子12、下男25

いかがであろうか。なんと大坊は家内24人、般若坊は同21人にのぼる。般若坊だけで、中之坊以下の寺院関係者の総計を超える。両坊は、榛名山御師のなかでも最有力な御師家・宿坊なので、これが榛名山御師の平均的な姿というわけではない。しかし、最有力の御師家とはいかなる存在であったかを伝える。

大坊の場合、当主一族は女房母までの8人で、これに加えて奉公人の下男・下女が12人、大坊屋敷内に住んでいたであろう譜代下男の家族4人からなる。参詣者の宿泊・休憩と参拝の世話、そして檀那場を廻っての初穂集め・お札配り、巌殿寺の用務、大坊における日常の衣食住等、用務は多岐に及んでいたはずである。

小規模な御師家もある例として大泉坊の姿も示したが、やはり家族経営である。このほか、

この五人組帳には坊号をもつ御師家が計７家見えるのだが、いずれもすべて妻を娶り、その子供らと同居している。つまり榛名山御師家は、永続性のある「家」なのである。

さて、先にみた出家僧は出世間の境涯の存在である。妻・家族をもつことはないし、修行・学問が優先で積極的には世事にかかわらない。他の寺院への転住、隠居あるいは死去により後継住職がやってくるが、後継は法類から選ばれ、地元に関係のない僧侶であっても転住してくる。住職が見つからず、無住となる場合もままあることはよく知られる。

必ずしも全員が地元社家町の事情に通じているわけではない、中之坊以下６名ばかりの少数・不安定な存在の出家僧らが、関東地域にとどまらない広範囲の地域からやってきていた膨大な参詣者・講を、わずかな下男らとともに主体的に管理・応対していたとは、到底考えられない。そうした管理・応対は御師家の独断場であったと見てよいだろう。大坊や般若坊の家内人数の多さは、こうした人的状況を必要とする業務があったことを物語ろう。

そして、家として永続する御師家こそ、同様に永続を志向する家からなる村落からの榛名山信仰を継続的に支える存在であり、巌殿寺（建物・出家僧）の維持に大きな役割を果たしてはいまいか。

出家者・非出家者という区分で宗教の問題を考えるとき、出家者を正式な宗教者とみなして、そのほかの者の役割を限定的にとらえる傾向がある。しかし寺社をめぐる宗教活動をおこなう世襲の俗家・俗人の存在には見過ごされている側面があるようで、しっかりと捉えなおしていきたいと思う。

執筆者紹介

原田　雅純　　元高崎市史編さん近代現代部会調査員

久保　康顕　　熊谷市社会教育課市史編さん室・日本山岳修験学会理事

表紙写真解説　**赤坂町絵図**〔享和４年（1804）／54.5×39cm〕

高崎城下赤坂町の絵図。1軒ごとに間口・奥行・職業・名前が記載されている。

なお、本資料は「群馬県立図書館デジタルライブラリー」（https://www1.library.pref.gunma.jp/winj/opac/switch-detail.do?idx=8）で公開されている。

市史のひろば　第４号

発　行　日　令和５年（2023）８月15日

編集・発行　高崎市立中央図書館

〒370-0829　高崎市高松町 5-28

TEL 027-322-7919／FAX 027-324-3423

E-mail toshokan@city.takasaki.gunma.jp

※「市史のひろば」は、高崎市立図書館公式ホームページに掲載されています（https://lib.city.takasaki.gunma.jp/）。